

# 林下曹洞宗における相伝史料研究序説（一一一）

——雙林寺所藏史料（其四）——

飯塚大 展

## はじめに

私見によれば、中世林下曹洞宗における嗣法相統は、大事（參禪）了畢を前提としていたと思われる。少なくとも室町時代以降、室内參禪修行（公案參究）が盛んに行われ、就中切紙や本參類の相伝が嗣法相統と同時に行われ、あるいはそれこそが嗣法相統そのものと考えられていた。

開山月江正文、二世一州正伊、三世曇英慧應の法灯を有する雙林寺は、一州派の拠点寺院として、特に戦国期以降、関東における曹洞宗最大門派の一つとして大きな影響力を持ち続けた。本稿では、一州派の教学的特徴を示すと思われる切紙史料の紹介を行いたい。先ず本參目録の成立について、略述してみたい。室町時代以降、曹洞宗道元派下における公案禪の援用は、その比重を増し、各派毎の本參の目録が作成されるほどに体系化されてくる。室町時代末期から江戸時代前

半にかけて、自派のみならず他派の本參を内包する形で集成され、大部の本參が成立することとなった。雙林寺所藏資料においては、『一州派大筋目一透之參』、『龍淵記』、『蛇窟記』、『彩鳳記』等が現存する。

しかし、このような公案禪の盛行は林下の共通の傾向と思われ、大応派下の二派、即ち徹翁派下（大徳寺派）、関山派下（妙心寺派）では、盛んに密參録が抄出された時代でもあった。五山叢林においても、室町時代後期以降、幻住派が盛んになると、林下の本參や密參録と類似性を持つ抄物が作成されるようになる。

切紙目録の成立も同様の過程をたどり、同時に切紙自体が一紙毎の切紙の形態から、切紙の集成として冊子化して行く傾向がある。これは関東における有力な諸派においても同様であった。具体的に謂えば、雙林寺には「総而四十三之切紙目録」（今回翻刻、後掲）所藏されており、江戸時代初頭、雙林寺室中において相伝されていた切紙の体系を知ることが

出来る。

また、江戸時代初頭、雙林寺における切紙の相伝については、例えば、「雙林寺切紙・本參目録」(雙林寺切紙 0130)\*筆者による整理番号以下同)、横長一冊、仮綴じ)には、以下の様に見える。

雙林寺切紙之次第

- (1) 一、永平道元和尚一枚密語、(2) 一、露柱之切紙、(3) 一、榮西記文録、(4) 一、應量器之圖、(5) 一、勃陀地之切紙、(6) 一、一州以来巡堂燒香之大事、(7) 一、六祖半紙切紙、(8) 一、大陽玄浮山付語本則、(9) 一、續松之切紙、(10) 一、伝授後之目録、(11) 一、嗣書血脉守護神、(12) 一、拈花之圖、(13) 一、七堂圖形、(14) 一、上来之話切紙、(15) 一、如来付嘱之語、(16) 一、血脉袋子狐之切紙、(17) 一、傳授秘密秘書秘語之目録、(18) 一、佛祖正法眼血脉、(19) 一、三星之圖、(20) 一、道元和尚住吉五个条、(21) 一、一本劔切紙、(22) 一、傳授之參、同傳後之參、
- 雙林寺代々如斯
- (23) 一、一州以来七佛儀式、道元書狀、(24) 一、大興和尚合判・偏正一致、(25) 一、二句偈之大事、(26) 一、寶鏡三昧圖、(27) 一、過去七佛傳授之切紙、(28) 一、拂子切紙、(29) 一、寂靈撰出之法語、(30) 一、應身之錄上

段」(31) 一、拄杖・拂子・竹篋之大事、(32) 一、梅花嗣書切紙、(33) 一、曹洞山居判形切紙(當寺ノガニテハナシ)、(34) 一、迦文勒三説大死底本則、(35) 一、佛祖正傳要法空塵書中段、(36) 一、無極和尚カタ假字目録御自筆ノ写シ。」

本書ハ補陀寺ニ在之。(1ウ)

- (37) 一、鐵漢大事之切紙、(38) 一、戒法傳授之作法、(39) 一、佛具三種之切紙、(40) 一、頂門眼之切紙、(41) 一、略道場之儀軌、(42) 一、祝聖之切紙、(43) 一、訓訣之切紙、(44) 一、卍之切紙、(45) 一、法嗣付与帳、(46) 一、嗣書袋・袈裟袋之圖、(47) 一、堪忍之切紙、(48) 一、道場莊嚴之切紙、(49) 一、太白峰合血之圖、(50) 一、傳授之作法、(51) 一、嗣書傳授之作法、(52) 一、曹洞三位之切紙、(53) 一、當參話目録并月之兩個、(54) 一、菩薩戒之作法大儀規、(55) 一、問訊之大事、(56) 一、夜半傳授之作法、(57) 一、天童如淨与道元嗣法論、(58) 一、門徒了畢之判形出法様、

従事鶴峰和尚<sup>并</sup>訣山和尚<sup>并</sup>洪州受取、大通和尚<sup>江</sup>相渡切紙之目録、大概<sup>并</sup>如斯。以来代々如此相調、小師<sup>七</sup>可被相渡者也。」

洪州察叟(花押)

最大山雙林寺本參之」目録<sup>并</sup>夜參之秘訣、同」秘傳之書相渡候

分」

(中略)

寛永十五年<sup>戊寅</sup>年正月吉辰」

洪州蔡老衲(花押)

無極派・一州派の切紙の目録は、長年寺所蔵の史料にも

「當門徒嗣書添渡次第目録」として収載されている。

當門徒嗣書添渡次第

一、達磨一心戒作法、二、空塵書(二段書之、長故<sup>二</sup>)、三、自家訓訣、四、龍天勘破話、五、大儀機、六、小儀機、七、梅花卷、八、十八般妙語、九、榮西記文録、十、卵形図、十一、國王授戒作法、十二、國王授形圖、十三、龍天授戒作法、十四、龍天授形圖、十五、<sup>(五方)</sup>五位圖、十六、君公書、十七、達磨傳法偈、十八、七佛傳法儀機、十九、同傳法授戒機、二十、勃陀勃地梵語、廿一、普門品相承、廿二、拈花微笑<sup>一</sup>則、廿三、永平開山密語、廿四、血脉包樣次第、廿五、道場莊嚴次第、廿六、卍字嗣書上法、廿七、三明星樣、廿八、天童十三則、廿九、了畢判形圖、三十、達磨知死期法、卅一、六祖半紙大支、卅二、俱胝一指本則、卅三、月兩箇、卅四、外道問佛金鎖圖、卅五、宝鏡三昧圖、卅六、順堂燒香儀式、卅七、亦道場莊嚴機、卅八、太白峰記(嗣法合血)圖、卅九、太白峰記(心王主之)三昧、四十、大白峰記隱身三昧、四十一、同小儀機、四十二、同道場儀式、四十三、沒後作僧儀式、四十

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(一一二)(飯塚)

四、嗣法添物諸録、四五、嗣法論、四十六、達磨歌、四十七、佛知死期法、四十八、生死支大、四十九、三門切紙、五十、八句夜參作法、五十一、夜參行作法、」

無極一派切紙之目録可秘々々。」

この目録と同種のものが、雙林寺にも相伝されており、天正七年(一五七九)の奥付を有する。更に一州派の本参史料である長年寺所蔵『門戸之書籍』には、その冒頭に、切紙の目録が付載されている。

○切紙(1)○七佛傳受作法、(2)○拈花本則、(3)○夜參之作法(4)○卍字之圖、(5)○佛祖正傳鐵漢大事、(6)○三滲漏大支、(7)○佛正傳勃陀勃地、(9)○達磨知死期、(9)○佛祖正傳菩薩戒之血脉、(10)○傳受之次第、(11)佛々祖々密室圖、(12)○傳鉢義記、(13)○佛祖正宗空塵書(下段)、(14)○上來之切紙、(15)○三宝印之參、(16)○合血之作法、(17)○師命受持椅子作法、(18)○卵形之圖、(19)○嗣法論、(20)○御大事參、(21)○佛祖正傳曹洞宗君決、(22)○龍天勘破話(血脉)、(23)○山居圖、(24)○同血脉、(25)○宝鏡三昧之圖、(26)○勃陀勃地之參、(27)○勃陀勃地梵語、(28)○上來之切紙、(29)○竜天勘破切紙、(30)○自家訓訣、(31)○二句之偈機縁、(32)○大魔境、(33)○榮西僧正記文、(34)○火焰裡之宅、(35)○道元和尚置文、(36)○八句夜參作法、(37)○我山不識上法語、(38)○月之兩箇、(39)○國皇授戒作法、(40)○宏智八

句、「(41)〇龍天授戒作法、(42)〇下炬之參、(43)〇最極無上圖、(44)〇入棺之切紙、(45)〇了畢判形之樣、(46)〇阿字、大事、(47)〇佛祖正傳戒法書、(48)〇傳授作法、(49)〇沒後授戒作法、(50)〇問訊之圖、(51)〇戒法傳授作法、(52)〇傳授之參、(1才) (53)過去七佛之血脉、(54)〇同傳授之參、(55)〇居士之作法、(56)〇一心之大事、(57)〇了畢切紙、(58)〇傳授之卷、(59)〇七堂之切紙、(60)〇嗣書燒却、(61)〇沒后作僧義記、(62)〇拈花之參、(63)〇拄杖起基、(64)〇道場作法、(65)〇篋竹之義記、(66)〇拂子之義記、(67)〇守護儀句、(68)〇疊字奇拜、(69)〇三世諸佛向火焰裡大法輪点、(70)〇頂相儀句、(71)〇祝聖之切紙、(72)〇妙之字、(73)〇順堂燒香之儀句、(74)〇生死叟大、(75)〇道歌、(76)〇六祖半紙、(77)〇峩山和尚一枚法語、(78)〇普門品相承、(79)〇妙來法王語、(80)〇應量器、(81)〇曹溪傳授之切紙、(82)〇合判之大事、(83)〇樹上話之切紙、(84)〇非人引導、(85)〇龜背宝塔密紙圖、(86)〇以字不成、(87)〇大白峯記、(88)〇三明星、(89)〇三說大死底本則、(90)〇佛祖眼目大叟、(91)〇祝聖傳授、(92)〇死灰之切紙、(93)〇臨濟家一枚血脉、(94)〇死母別腹、(95)〇續松之切紙、(96)〇同參禪、(97)〇御大事、(98)〇諸目錄話頭目錄、(99)〇臨終問答切紙、(100)〇塚火消切紙、(101)〇十八般之妙語、(102)〇梅花之卷、(103)〇大儀軌、(104)〇小儀規、(1ウ)雙林寺には、外に、無底派の切紙目錄である、「切紙之目

録」(0133-004)が所蔵されている

無底一派切紙之目錄總之切紙、以是可包也、密用也。

一、道場莊嚴之次第、二、嗣書袋之圖、三、嗣書之地之様子、四、鉢孟之圖、五、相傳之經偈、六、袈裟囊之圖、七、自家之訓訣、八、天童嗣法論、九、榮西僧正記、十、釈尊遺戒偈、十一、血脉之因縁、十二、國王授戒之作法、十三、國王授戒之血脉、十四、龍天授戒之作法、十五、龍天勘破機縁、十六、龍天授戒之血脉、十七、卵形之圖、十八、空塵書、十九、大叟之上之大叟、二十、二句之偈傳授、廿一、六觀音之圖、達磨知死期之偈、廿三、曹溪傳授之半紙、同傳授之圖、廿四、宝鏡三昧之圖、廿五、牛窓櫺之圖、廿六、即身佛之圖、廿七、末后之句之圖、廿八、七佛之嗣書、廿九、樹上之圖、卅、月之兩箇、

江戸時代初頭以降、雙林寺における切紙相伝は、自派(無極派・一州派)の集成・体系化にとどまらず、更に他派の切紙を内包していったものと思われる。

一州派の教学的体系は、江戸時代初頭から前半における永平寺のそれにも影響を与えている。永平寺所蔵「切紙目錄」は、永平寺二七世嶺巖英峻(万照高国禪師)によってまとめられ、同寺二十九世智堂光紹が相伝したものであり、百五十七種の切紙を列記した後に、「參禪卷冊覚」として、別に二十二種の本參資料の目錄が附記してている。さらに永平寺第

三四世叡州高郁（大仙国光禪師、元禄元年（一六八八）示寂）が、貞享五年一〇月永平寺退院に際して記録した「伝授室中之物」にも、永平寺室中において伝授相伝され、室中の参禅箱に収蔵された本参・切紙類が列举されている。ちなみに、智堂は、長年寺住持を勤めており、一州派の本参・切紙史料を相伝している。

以下、雙林寺所蔵の切紙の一端を翻刻したいと思う。

## 注

（一）永平寺史料全書編纂委員会『永平寺史料全書禅籍篇』第一

四卷（大本山永平寺、二〇〇三～二〇〇七年刊）

永平寺史料全書編纂委員会『永平寺史料全書文書篇』第一・二

卷（大本山永平寺、二〇一〇・二〇一〇一七年刊）

拙稿「林下曹洞宗における相伝史料研究序説（一）」永平寺所

蔵資料（上）（『駒澤大學佛教學部研究紀要』第六六号、二〇

〇八年三月）。

〈キーワード〉雙林寺、切紙目録、一州派

## 〔追記〕

末尾乍ら貴重な史料の翻刻を御許可戴きました、雙林寺御住職石  
附正賢老師に甚深い謝意を表します。史料翻刻に際して曹洞宗文化  
財調査委員会所蔵の影印資料を参照させて頂きました。併せて関係  
各位に感謝申し上げます。

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二二）（飯塚）

本論稿は、「禪と心」研究の学際的国際的拠点づくりとブランド  
化事業」の研究成果である。

## 【翻刻凡例】

一、本史料翻刻に際しては、底本には、双林寺所蔵切紙を用  
いる。

一、底本の翻刻の体裁は、史料の原形をできうる限り反映さ  
せることを原則としたが、掲載の都合で図と本文との関  
係（前後左右）を変えた場合がある。文字の大きさも同  
様に、必ずしも統一できていない箇所がある。

一、翻刻に当たっては、異体字・略体字・別体字・俗字等  
は、原則としてその書体に近い形で翻字を行った。ただ  
し一部現行の書体にて翻字した場合がある。省文等も同  
様である。また、明らかに誤写と思われる部分について  
は、また脱字が明かな場合には、必要に応じて他のテキ  
ストを参考にし、傍注を付した。

一、踊り字について、片仮名は「、」、「、」、「、」、漢字は「々」、  
「々々」を用い、二字以上の「く」「ぐ」「ぐ」も用いる。  
一、合字の「ㄣ」「メ」「セ」「ク」「ク」「ク」は、そのまま翻字す  
る。

一、濁音・促音等の表記は、原文のままに翻刻し、敢えて統  
一ははからない。

一、句読点に関しては、読解を便ならしむるために適宜これを補う。

一、改行は、『』を用いた

本論文において翻刻した史料には、現代社会の視点から見ると、人権侵害に該当する差別的内容を有するものがあるが、歴史史料の性格上、そのまま掲載した。史料の取り扱いは、差別の助長や拡大にならないよう、十分注意していただきたい。

双林寺切紙 〇一四 空塵書

(141) 空塵書

釋迦牟尼佛 空塵書 摩訶迦葉 教主歟

正安元年<sup>壬子</sup>四月十五日上堂<sup>ニ</sup>因<sup>テ</sup>、世尊ケウシユ花」ヲ拈<sup>テ</sup>、八万人ノ大衆、五百人ノ上足<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>指上玉ウ。大衆方」便ヲメグラシテ、同見ントスレドモ、世尊ノ心<sup>ニ</sup>叶ワズ、迦葉」一人微笑ス。世尊云、我正法眼蔵、涅槃妙心アリ。迦葉」付属ストノマウ。サテ、後夜<sup>ニ</sup>ヲイテ、佛々ノ義式<sup>儀カ</sup>ヲナサント」ス。八万ノ大衆、五百人ノ上足<sup>ノ</sup>目ヲ忍<sup>シヒ</sup>、耳ヲフサギ、夜半<sup>ニ</sup>ヲ」イテ、靈山溪川ノ洞、ウバラ樹ノ室<sup>ニ</sup>入玉ウ、廣<sup>ク</sup>四間、世尊ハ金象」獅子ノワダカマル上<sup>ニ</sup>、西<sup>ニ</sup>向テ坐シ玉ウ。迦葉ハ東<sup>ニ</sup>向テ、西<sup>ニ</sup>」坐シ玉ウ。外面クラクシテ、通

所相ガタシ。則チ照鷄此室<sup>ニ</sup>」來ル。照鷄トハ、トリノ名ナリ。兩頭ナリ。色ハ赤白、九所マダラ」ナリ。頭<sup>トウチウ</sup>中ヨリ火炎ヲ出シ、此室<sup>ニ</sup>有テ、ヒトエニ灯ノゴトシ。即法」火發スル所也トテ、世尊天<sup>ニ</sup>向テ同時<sup>ニ</sup>礼拜シ玉ウ。迦」葉<sup>ノ</sup>坐具ハ上<sup>ニ</sup>有、世尊ノ坐具ハ下<sup>ニ</sup>有<sup>テ</sup>、礼三拜アリ。前」佛後佛之儀式同クシ玉ウ。即兩鏡ノ面ヲ合<sup>テ</sup>、既<sup>ニ</sup>袈」袈ノ威儀ニテ頭ヲカクシ、上ノ鏡ヲ世尊ノトリ玉ウ、下ノ鏡ヲ」バ迦葉取玉ウ。影ヲ移シ玉ウニ、師<sup>ノ</sup>持玉ウ鏡ニワ、迦葉ノ影」アリ。迦葉ノ持玉ウ鏡ニハ、世尊ノ影有。是即佛々ノ通所ナリ。」如是畢テ、袈袈ノ威儀ヲ以テ頭ヲマキ、摩頂<sup>ノ</sup>云、兩」鏡正<sup>ニ</sup>通用ナリ。正法眼蔵ヲ傳テ、尽未來際、勿令斷」絶。是即佛々ノ口口ノ偈ト云也。次一鏡ノ影ヲウツシ、中<sup>ニ</sup>世尊」御名移シテ、一鏡ノ影ヲイタ、キ、迦葉御名、舌ノ血ヲ合礼」有。木筆ヲ以テ名字連、前佛後佛之儀式如是。末代」之佛佛<sup>ニ</sup>ヲイテ勿令斷絶。如是儀式ナルニ依テ、佛菩<sup>ノ</sup>薩ノ頭光、一鏡ノカゲナリ。又云、紫雲ナリ。如是二十年畢テ、」切利天ニマシマシテ、十二年摩耶經ヲ説玉ウ。八万ノ大衆白」佛言ク、此經文ノゴトキンバ、是法平等<sup>ノ</sup>一會<sup>ニ</sup>入ズンバ、三」界ノ亡人イカニノ度シ玉ウベキ。願ハ方便ヲメグラシテ度」シ玉エト悲ム。佛ケ之言、一會<sup>ノ</sup>方便ヲ以テナリト、コンザ」ウジ戒ヲ」説玉ウ。一鏡ノ面テ<sup>ニ</sup>アラワル、頭<sup>ニ</sup>イタ<sup>キ</sup>、世尊ノ御名アラワシ、」前佛後佛ノ名字ヲ連子<sup>ネ</sup>、舌ノ血ヲカタド

リ、自他ノ頭ニソ、キ、「照鷄ノ灯ヲ傳ウ、九所マダラナルニタトエ、續松ヲナス。諸佛之」儀式、佛佛之命根ナリ。道場ハ塔也。ガクハ皈傳塔トアラ」ワシ、菩薩・聲聞・緣覺、雲ノ如ク集ル。摩訶陀國ノ大王、六万」人ノ眷属ヲタナヒキ、此平等ノ一會ニ至ル。六種震動シテ天地」ヲ動ズ。爰ニ第六天ノ魔王、佛ヲ障碍ヲセンガ爲ニ、盤石ヲ取」テ、此塔ヲ打クダカントシタガ、此塔ノ数ズ多現メ、イクツトモナシ。」魔王、盤石ヲ取テ、文字ヲ現シ、額トシ、虚空ヨリナゲクダス。」多子塔ト現メ、後門ニツク。十二年畢テ、中天竺ニ弘ヒロム。天台」ノ云、維摩室ニ至迄、如傳カ是轉々シ、以テ佛勿ニ令斷絶」。此空」塵書ノ如キンバ、末代ニ至ルマデ、疑亘不可有。若不如是」者、天然外道ノ法ナルベシ。此空塵書、モトハ梵語ナリ。久ク」メ文字サダカナラズ。末代ニヲイテ此ヲ学文トナスベシ。法」スタレル始ナルベシトテ、永平二代之時、教ヲバカナトナシ玉ウ。」本ノ本ヲハ、永平開山之御影之心ニ収玉ウナリ。本ノ料紙」ハ、唐紙ナリ。敢テヒロムベカラズ。正法トハ鏡、眼藏トハ舌ノ血ナリ。」涅槃トハ、大涅槃トナルガ故ナリ。妙心トハ、照鷄ノ燈、付属ト」ハ通所ナリ。」

釋迦牟尼佛、摩訶迦葉、阿難陀、商那和修、優婆塞多、」提多迦、弥遮迦、婆須密多、佛陀難提、」伏駄密多、婆栗湿縛、富那夜奢、馬鳴、迦毘摩羅、」龍樹、迦那提婆、羅睺羅、僧

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(一一二)(飯塚)

伽難堤、」伽耶舍多、鳩摩羅多脱カ 闇夜多、婆須盤頭、」摩拏羅、鶴勒那、獅子、婆舍斯多、」不如密多、般若多羅、菩提達磨、二祖惠可、」三祖僧璨、四祖道信、五祖弘忍、六祖惠能、」青原行思、石頭希遷、葉山惟儼、雲岩曇成、」洞山良介、雲居道膺、同安道否、同安觀志、」梁山緣觀、太陽警玄、投子義青、芙蓉道楷、」丹霞子淳、長芦清了、天童崇珏、雪豆智鑒、」天童如淨、永平道元、永平懷牂、大乘義价、」洞谷紹瑾、総持紹頌、永澤寂灵、慈眼天真、」龍興清了、長源禪幢、長源禪長、長源三世祥貞、」長源四世啓三、長源五世祖幢、長源六世玄東、」長源七世文虎、長源八世清春、長源九世周看、」釋迦ヨリ周看迄六十八世也。長源十世用益、」佛祖正道勃陀勃地、」

書本云、」

右太宋寶慶元年九月十八日、前住天童景德寺」堂頭和尚授道元式如儀是。祖日侍者、于時燒香侍者、」宗瑞知客、廣乎戒儀。太宋寶慶年中傳之也。」右正應五年八月十三日、在テ正本書寫畢。」

獅子尊者、過去ニテノ亘、是モ大亘ニ奉納ス。」

尊者、過去ニテ、ケイヒン國カウホト云里ノ獅子崛ニマシマス。過去ニテモ比丘僧ニテ、ヨロツヲ供養シ玉ウ。教者、所ニテ、禪」教ヲ論ジ玉ウ。法我ヲ越シ、教者ニ毒ヲアタエラル。命即没」ス。此國ノ王是也。尊者、現在ニ因果ヲハタサ

ンガ爲ニ、又獅子」幅ニ入玉ウ。同里ニシウカウト云長者アリ。子ヲ一人モツ、男子」ナリ。十七歳マデ左ノ手ヲ開支ナシ、又モノヲ言支モナシ。カタワ」物ナリ。長者是ヲ悲ム。有時尊者ノ前ニツレテ來ル。童子、尊者ニ向テ偈ヲナシテ云、我今古子、手中現在、皆是」其中、身心舍利。左ノ手中ニ舍利ヲ持ナリ。」  
于時元龜三年<sup>壬閏三月念七日</sup>

双林寺切紙(142) 參話集

(142) (參話集仮題)

地絹之參」

師云、松竹梅ノ三ヲ、何トテ地ギヌ」ニワ用タソ。代云、ナントナク只アリニ」行テ、世尊ワ松王、迦葉ワ竹王、阿難ワ是梅王、ト云テソウ。師云、ア」レワ何トテ、地ギヌニワ用タソ。代云、白色ノ根本ヲアラワシテソウ。」心ハ、凡夫ノ血脉ニ、ヲサナ名ヲカクベ。」ウマレヲチタハダエガ、世尊、迦葉ヨ。」

合法之參」

師云、合法之眞參ヲ。代、方法一如」一合相。師云、点処ヲ。代、目前ヲ指」テ万法、自己ヲ指テ、一如一合相。」

印可之參」

師曰、三宝印ノ宝ニ、ナントツタカラ宝」ヲカイタソ。代、佛法僧ノ三ヲキワ」ムルガ、タカラデソウ。師云、印可ヲ。」代云、師ノマエニ入テ、和尚、大慈大」悲哀愍聽許ナラバ、印可シタマ」エ。処ヲ、師右ノ手ヲサシアゲテ、イタ」キヲツカント、印判ヲツクモヤウヲナシテ」云、黄河從」源頭」濁」ル。汝能護」持セヨ。」

仏頂上之一圓參」

師云、頂上ノ一圓ノ心ヲ。代、心ノ一字」テソウ。師云、心ヲハ、何トツタエ、ナント相」續シタソ。代、以心傳心。師云、釋迦ヨリ」六十九世周看・用益トツリツ、ケタ」首尾ヲ合セヨ。代、我今盧舍仏。」

勃陀勃地之參」

師云、勃陀勃地ヲ。代、心仏無碍カ、勃陀」勃地デソウ。師云、其意ヲ。代、光明照」世間。」師云、釋迦ヨリアマ妙心ニツリツ、ケタ」キラ。代云、本有圓成如來、却同迷途」同」衆生」ニ。師云、道心道滿ヨリ釈迦ニツリツ、ケタキラ。代、迷途」衆生却同」本有圓成、如來」ニ。門中傳底此上無之。」

長源九世觀峰叟」

付与 融益和尚」

天正酉二月吉日」





双林寺切紙〇二〆勃陀勃地之梵語

(143) 勃陀勃地之梵語

(端裏)

ノノ 勃陀勃地之梵語

釋迦牟尼佛勃陀勃地摩訶迦葉勃陀勃地

為哲勃陀勃地正栢勃陀勃地慶瑣勃陀勃地宗祥

○圓相、縱橫宛轉兒ナル故無終無始、自在縱橫也。」

即是蓮華法益下云也。」

○勃陀勃地、梵語也。茲者、菩薩摩訶薩、內心ハ佛心ハ而、外相菩薩相也。嗣書如此可書也。」

○佛祖命脉、證契即通、坊主即通、正栢通慶勝通宗祥

至祝々々至禱、在判」

梁樞正栢和尚、宗祥禪人仁付之畢。」

時天正十二年甲申二月吉日」

双林寺切紙(14) 拈花微笑参

(14) 拈花微笑参

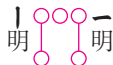
(端裏) 「拈花微笑参尖堯拜」

● 左手 一 数始 三 明始 五 事始 七 外始 九 横 一、正法、涅槃、實相、微笑

横位 日輪 左眼 真空

「有時不見」「心花發明」「靈々寂々」「妙異本」  
 「葉落皈根」

● 拈花即妙、十箇指頭、横豎異名、



一明 十、微笑、只是阿、其形只箇阿

● 右手 二 豎位 四 月輪 六 右眼 八 性空

物窮 暗窮 理窮 外窮

十豎位窮、眼藏、妙心、無相、法門

「暗昏々」「十方照刹」「來時無口」  
 「無色空」

● 和合妙相異名

拈花即妙ヲ云エ。左手右手。一中十位ヲ云エ。横位豎位。横位異名ヲ云エ。日輪月輪。

五六ヲ云エ。左眼右眼。七八ヲ云エ。真空性空。九十ヲ云エ。横一豎一。総結ヲ。明々。

「始也」「窮也」

●横ノ一堅ノ一ニ當テ云エ。明ノ始又暗ノ終。左眼右眼ニ當テ云エ。夏ノ始理ノ終。真空性空ニ當テ云エ。外ノ始外ノ終。」●横ノ一堅ノ一ニ當テ云エ。横位横ノ一堅位。明々ニ當テ云エ。一ニ當テ云エ。一ニ當テ云エ。明聖明、畢竟微笑、唯是レ阿。師云、「阿形相ヲ云エ。白晝也、四方一色。八箇ノ阿ヲ云エ。五ノ指ヲ兩方ヨリ向フ。和合妙相ノ異名ヲ云エ。正法、眼藏、涅ノ槃、妙心、實相、無相、微妙、法門。各ノ左ノ阿ヨリ八ニ合スル也。正法眼藏ニ當テ云エ、眼看テ不レ見暗昏々位ニ合ル也。」涅槃妙心ニ當テ云エ。心花發明照十方刹。實相無相ニ當テ云エ、靈々寂々無色空。微妙ノ法門ニ當テ云エ。葉落皈根、來時無レ口。

●横位ニ八方具ニ云エ。一四方羅。豎位ニ大地ノ二位ヲ具ニ云エ。天地和合スレバ三位。具ニ三位ヲ云エ。過現未振舞一筆勾下。或上視下視。」

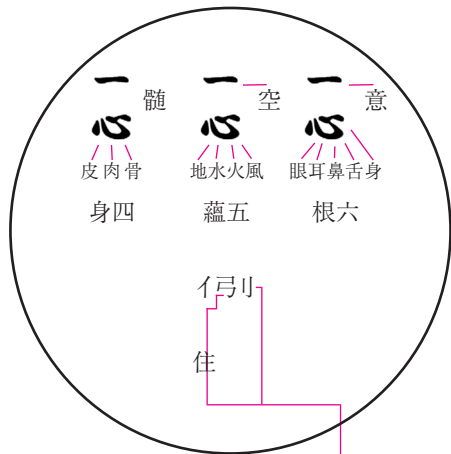
●瞿曇尊老ハ、何ト拈テ御座走。一位ニ拈テ御座走。頭陀尊者ノ微笑ハ、何ト笑テ御座走。一位ニ笑テ御座走。拈ジタハ從縁、微笑ハ不從縁、外ノ塵トハ、何ヲ云ゾ。云々、色相ヲ申ソウゾ。外トハ、何ヲ云ゾ。「性ガ、外テ走。一ハ陰位、一ハ陽位、和合妙相、十方ヨリ見ルニ、一人ノ横ハ、縦ハ、人ノ二也。」

天正十七己丑臘月吉辰

傳室在判

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(一一二)(飯塚)

双林寺切紙0145無徹所  
(145)「無徹所切紙」(飯塚)  
(端裏)「上冊一ハ徹所」

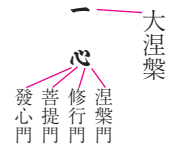
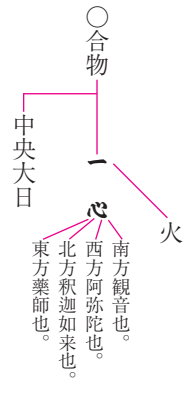


○趙州無。師云、本無ヲ。代、師ノ前ニ入テ、心ノ字ヲ書、是レテ走。師云、有無ノ兩意ヲ。代、一圓相作也。師云、本無當着ヲ。」代、心性正ノ三ツテ走。此四ヲ拂タ時、佛也。是ヲ能了得見レバ、心佛之二字也。於此ノ二字ニ、無形無相成ルガ故ニ、釈迦・弥勒護持ノ命根ト作シ、外道・

天魔者拱レ手ヲテ走ゾ。○是即本無也。是即變而○是也。色

空之ニツゞ。此一点者異也。是<sup>ニ</sup>生滅ノ沙伏<sup>（法カ）</sup>ワ無イゾ。程ニ、世間ノ空ハ、空<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>佛性<sup>一</sup>、空々真<sup>ト</sup>云モ向也。引而、祝聖ノ回向ノ時、心性正之三字<sup>モ</sup>向也。心ハ、無極也。性者、大極也。正者、混頓也<sup>（混カ）</sup>。爰ヲ諸佛諸祖<sup>モ</sup>祝也。心佛、心王、無量壽佛<sup>ト</sup>心得可キ也。○色 ●空 ○是ヲ色空ノニツ合如此也。○一ハ、無味也。心ハ、有味也。」

○一心六点是也 即 示是 米飯錢話合<sup>テハ</sup>、心此四点、味間、○一此一点味無<sup>キ</sup>也。無味時地獄無也。」



○  
三  
三  
是即爐圓也。

○  
三  
三  
○心同意。

○一 一豎窮三際横該十方是也。示天地・陰陽・一易・二義<sup>（辨カ）</sup>・四象・八卦是也。呈<sup>ニ</sup>種々幻化<sup>ノモ</sup>、本無者無形無相<sup>ナリ</sup>依、○蹤跡無<sup>キ</sup>也。サテ亦能<sup>ク</sup>見得<sup>スレバ</sup>、面門従り出入也。一 一心是也。傳附 傳室叟

于時慶長二年

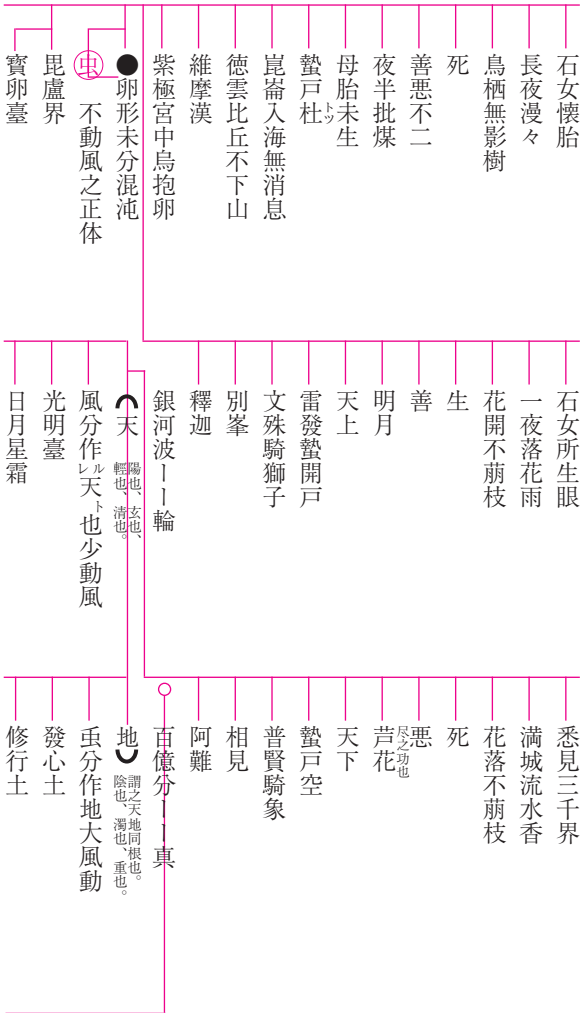


双林寺切紙 1016 卵形之圖切紙

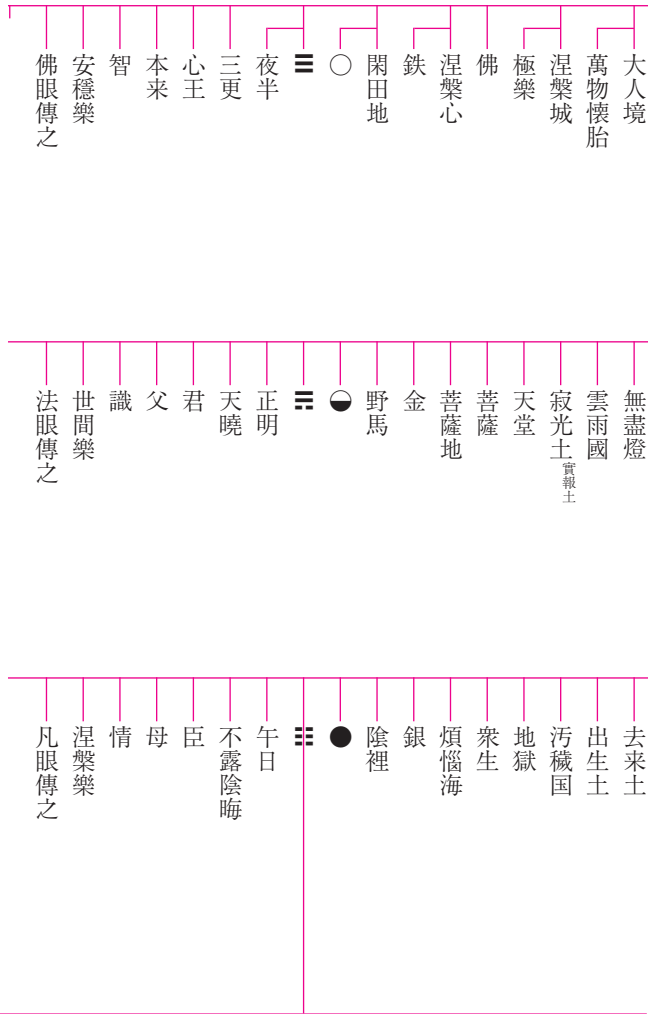
(146) 「卵形之圖切紙」

(端裏)

「卵形之圖切紙」



林下曹洞宗における相伝史料研究序説(一一二)(飯塚)



鄂州太陽明安大師 投子青 芙蓉楷 丹霞淳 真歇了 天童宗珏  
 雪竇智鑑 天童南谷如淨、附日本僧道元 々々 懷奘 義介 紹瑾  
 韶頌 寂靈 惠明 惠徹 代々流傳、今壽泰傳授畢。

恕藝授壽泰畢。

峯慶長十年



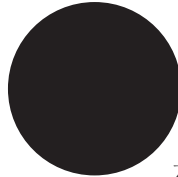
双林寺切紙 0147 六祖半紙圖

(147) 「六祖半紙圖」

(端裏) 「六祖半紙圖」

○六祖半紙大夏

釋迦無性也



印 釋迦無性也

釋迦無性也

○全釈イ迦迦葉不レ許、迦葉世尊ヨリ不傳。只黒之レ

一位方傳衣ト成ツタゾ。一位ヲ渠トモ指ス。渠全レ

断絶ワ無ゾ。古心トモ心得可シ。ドレモ無相ノ時、今レ

時モ久遠也。レ

六祖イ一世明白裡ヲ不レ知ヌゾ。

○師云、參ヲ。代云、  
平生末后ナレバ、末后モ平生ニ

底益浦益

付与存達

恕玖和尚判

慶長拾貳年末正月十二日

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(一一二)(飯塚)



(花押)





之。」<sup>ハ</sup>廿五、七重袋忌不淨、<sup>ハ</sup>廿六、曹溪傳授」半紙、<sup>ハ</sup>廿七、寶鏡三昧之圖、<sup>ハ</sup>廿八、牛窓櫺之圖、<sup>ハ</sup>廿九、即心即佛圖、<sup>ハ</sup>四十、末后句之圖、<sup>ハ</sup>四十一、五位・三位圖<sup>并</sup>」<sup>ハ</sup>五位本則、<sup>ハ</sup>四十二、且望佛殿札拜燒香儀式、四十三、七佛嗣書、別袋赤錦入<sup>ハ</sup>。」

<sup>ハ</sup>右如此目錄不可容易他見者也。

無底一派之密要也。末派<sup>三</sup>不可下」者也。」

無底・在室兩判在之。」

慶長十四年<sup>酉</sup>十月如意<sup>日</sup>書存易  
総而四十二之切紙目錄



双林寺切紙050大源和尚之切紙

(150)「大源和尚之切紙」

端裏「愚明叟／附与全鷲／大源和尚之切紙」

老和尚殘所之一事、先日申上候。」

大慈大悲哀示誨。」

霜月十五日

普藏丈室下<sup>江</sup>」

寂靈



七佛儀式之一事尤候。廿日寅尅」  
可令呈示也。地絹三尺五寸之分」  
可有用意者也。」

真在判

妙高<sup>江</sup>

付与秀譽

双林寺十二代訣山

于時元和二<sup>丙</sup>雪月十三日」



(151)「拄杖拂子切紙」、(152)「念佛之血脈」省略。

双林寺切紙053 三國相伝袈裟伝衣之切紙

(153)「三國相伝袈裟傳衣之切紙」

端裏「<sup>ハ</sup>三國相傳袈裟／傳衣之切紙／三衣沙汰<sup>并</sup>圖耳也。」

○釋尊於<sup>二</sup>靈山會上<sup>ニ</sup>而爲<sup>ニ</sup>衆生化度、名<sup>ニ</sup>無相福田衣<sup>ト</sup>給也。然<sup>ル</sup>ヲ、<sup>ハ</sup>元和尚正法眼藏自<sup>ニ</sup>傳衣卷<sup>一</sup>移持マ、法衣囊<sup>ニ</sup>納<sup>ル</sup>者也。」

○五條衣者、表<sup>シ</sup>五佛<sup>ヲ</sup>顯<sup>ス</sup>五智<sup>一</sup>。三十五佛住<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>故<sup>ト</sup>者、<sup>ハ</sup>此袈裟<sup>一</sup>者、<sup>ハ</sup>離<sup>ニ</sup>五欲<sup>ヲ</sup>、斷<sup>ニ</sup>五煩惱<sup>ヲ</sup>、得<sup>ニ</sup>神通<sup>ヲ</sup>、備<sup>ニ</sup>ル<sup>コト</sup>ヲ五智<sup>ヲ</sup>得<sup>リ</sup>、三世諸佛諸相傳<sup>リ</sup>袈<sup>一</sup>裟也。故<sup>ニ</sup>行道衣<sup>ト</sup>曰、亦曰<sup>ニ</sup>作務<sup>一</sup>、一切時中、用<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>袈裟<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>、今汝<sup>ニ</sup>授<sup>ニ</sup>此衣者也<sup>ト</sup>云。」

○七條衣、表<sup>シ</sup>七佛<sup>ヲ</sup>、顯<sup>ス</sup>七菩提<sup>一</sup>・七聖財<sup>一</sup>・七等覺<sup>一</sup>支<sup>一</sup>。皆<sup>テ</sup>在<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>、是<sup>ヲ</sup>名<sup>テ</sup>号<sup>ス</sup>食衣<sup>ト</sup>。持<sup>ニ</sup>此袈裟<sup>ヲ</sup>、法喜

禪悦食、滿心中故、外離七遮罪。内得七種善。此袈裟ハ、二百三十五佛ヲ縫頭ス。是三世ノ諸佛相傳ノ袈裟也。故今日授レ之者也ト云々。」

○九條衣者、三世之諸佛ノ法衣也。上廿五條、下到九條ニ為一衣ト。持レハ此袈裟者、上中下九條也。授九條者、如来九識圓備之智体也。此袈裟三百五十五佛ヲ縫頭。授此袈裟者、離九忘心至究竟妙覺之果。是則三世ノ諸佛解脱幢相之袈裟也。故今授レ之者ハ頓ニ尽三惡道、得ニ妙樂果一也云云。」

○法衣ハ有レ三。僧伽黎ハ七條、鬱多羅ハ七條、安陀衣ハ五條ハ名ニ中衣ト。七條名上衣、大衣ハ名ニ衆集時衣ト。三世如来並着ク如是衣ヲ。五條斷ニ貪瞋業ヲ、七条ハ斷ニ心口意業ヲ、大衣ハ斷ニ痴心業ヲ、三衣生ス萬善業ヲ云云。」

○正法眼藏傳衣卷ニ云、佛ハ從レ佛受テ、祖ハ從レ祖師受、如今從レカ何ニ可傳云云。是即請処也。於爰ニ拈衣參畢之。應ツ凡夫即佛傳、佛一度還凡夫能護持ヨ。収テ囊、師云、如来嫡傳之法衣、而今正至ニ六十九世ニ、吾附ニ授你ニ、你能護持、於ニ尽未來際ニ、莫レ令斷ニ絶佛種ヲ。至祝々々。」如レ斯ニ返唱傳受畢。」

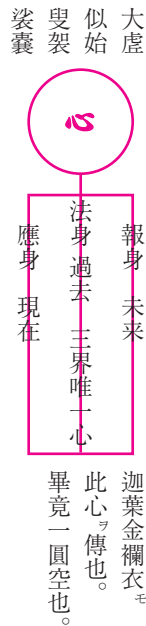


圖 六祖傳衣モ此ノ心ヲ傳也。

○佛靈鷲山御建立之時成ス七種相ヲ。時以ニ一圓相ハ、彼ノ外道波築ノ岳ト謂ウ、山後之下者、波ノ築ノ洞ヲ謂。彼ノ兩郷有ニ意子細一成レ沼ト。佛方便ヲ以、成シ田地ト給。是ヲ則「形取テ五條・七条・九条ヲ縫立テ、名ニ袈裟、名ニ無相福田衣ト。頂ニ戴」之者、五逆・十逆之者也其モ、惡逆還テ成テ善事ト得ル即心也。自ニ一尊迦葉一以来、第〳傳附而、於テ天童室ニ、如淨和尚ノ道元ニ傳附畢。自レ其帰朝以来、傳ニ附シ懷井ニ、第代到ニ當門戸ト寛隆ニ迄テ傳附畢。今隆和尚存瑣ニ傳附者也。」寛永七年辛未 貳月如意日」

前永平當寺八世天徳寛隆老

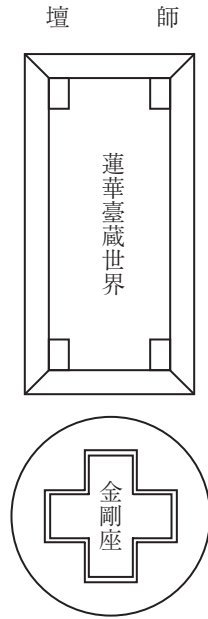


今存瑣ニ傳附畢者也。」

双林寺切紙 0154 三國相傳金剛座之切紙

(154) 「三國相傳金剛座之切紙」

端裏「三國相傳／金剛座之／切紙」



昔日於<sub>テ</sub>靈山會上、世尊向<sub>テ</sub>迦葉<sub>ニ</sub>曰ク、夫<sub>レ</sub>熱<sub>ク</sub>以<sub>レ</sub>座具者、蓮臺<sub>ニ</sub>藏金剛座是也。開<sub>テ</sub>此座具<sub>一</sub>、奉仰<sub>儔</sub>三世諸佛者、則座<sub>ニ</sub>具之面上<sub>ニ</sub>皆座給<sub>ヲ</sub>而表<sub>シ</sub>四性<sub>ヲ</sub>、假<sub>ニ</sub>表<sub>ル</sub>二十一<sub>一</sub>因縁<sub>ヲ</sub>者也。依號<sub>ニ</sub>座<sub>一</sub>具也。故善哉尼師檀諸佛所<sub>ニ</sub>受用<sub>ノ</sub>、願<sub>ハ</sub>共<sub>ニ</sub>一切<sub>ノ</sub>衆常<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>其<sub>一</sub>中<sub>ニ</sub>座<sub>シ</sub>給也。右之則者、三世諸佛之金剛座也。然者、登<sub>ニ</sub>此座<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>、正<sub>ニ</sub>座<sub>ニ</sub>金剛座<sub>一</sub>、三惡趣<sub>ノ</sub>無<sub>シ</sub>怖畏<sub>一</sub>云。如<sub>レ</sub>是以<sub>ニ</sub>道理<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>末世之比丘<sub>一</sub>、歷代之祖師<sub>一</sub>、從<sub>ニ</sub>如來<sub>一</sub>迦葉的傳以來、西天四七、東土二三、南能北宗、脉々相承、南能<sub>ハ</sub>青石藥山<sub>一</sub>、雲洞曹承嗣<sub>シ</sub>來、到<sub>ニ</sub>天童淨老<sub>一</sub>。今日本吾朝之初祖道<sub>一</sub>元入<sub>レ</sub>宋<sub>ニ</sub>傳法<sub>ノ</sub>時、親<sub>ク</sub>傳<sub>ニ</sub>得<sub>リ</sub>此蓮華臺之金剛座<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>其<sub>一</sub>以來、第<sub>々</sub>到<sub>ニ</sub>當門派代々<sub>一</sub>存瑣<sub>ニ</sub>迄、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説 (一一二) (飯塚)

傳附既畢。」

永平道元和尚、於<sub>ニ</sub>末世之門<sub>一</sub>家<sub>ニ</sub>、無<sub>ニ</sub>此式作法<sub>一</sub>者、其之家之門首、從<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>斷<sub>ノ</sub>甄別<sub>一</sub>者也云。亦云、既是大地無寸土、為<sub>ニ</sub>什麼<sub>一</sub>為<sub>ニ</sub>座具<sub>一</sub>云、又手當胸。云、為<sub>ニ</sub>什麼<sub>一</sub>恁麼道云、十方智者皆<sub>一</sub>入此宗。云、悉<sub>々</sub>。

前永平當寺八世天德隆

皆寬永七年<sub>辛</sub>貳月如意日

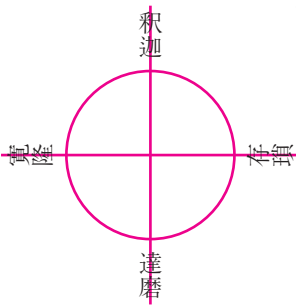
附与存瑣九拜。」



双林寺切紙 0155 參禪了畢之切紙

(155) 「參禪了畢之切紙」

端裏「參禪了畢之切紙」



門派大叟參禪了畢。」

皆寛永八年<sup>丁未</sup>菊月拾五日」

前永平當寺八代天德隆叟納



附与存瑣老柄。」

双林寺切紙0156 円相・大円相・血脉之參三ツ之切紙

(156) 「円相・大円相・血脉之參三ツ之切紙」

端裏「円相・大円相」／血脉之參／三ツ之切紙」

圓相<sup>ヲ</sup>。代云、無始無終<sup>テ</sup>走。師云、無始無終之<sup>レ</sup>時如何<sup>シ</sup>。  
云、手<sup>ヲ</sup>クンデ<sup>モク</sup>黙トメ云、我今盧舍那佛畢竟也。」

大圓相ヲ。代云、無始無終走。師云、無始無終<sup>ノ</sup>時如何<sup>シ</sup>。  
代、三世ノ諸佛<sup>モ</sup>如何<sup>シ</sup>共セラレ走ヌ、畢竟了也。」血脉之參<sup>ヲ</sup>。  
師云、宝瓶ヲ云エ。挙ス、急度目ヲ塞<sup>フサ</sup>イデ<sup>テ</sup>良久<sup>ク</sup>而次第ノ

低頭<sup>ヲ</sup>云、ヲ末ノ爰方法衣・應器、亦次」

第<sup>一</sup>仰面<sup>ス</sup>、目ヲ卒度開<sup>テ</sup>左右見<sup>テ</sup>、兩ノ手<sup>ヲ</sup>頭<sup>ニ</sup>互<sup>ニ</sup>指合<sup>ス</sup>  
テ、無宝瓶傾ケテ走処ヲ。師云、嗚<sup>一</sup>物<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>遺<sup>コ</sup>サスト云<sup>モ</sup>澄<sup>ス</sup>  
タカ、懷敵記スト云モ澄<sup>ス</sup>タカ、同傳授之參<sup>ト</sup>云モ澄<sup>ス</sup>タカ、了  
也。爰テ其俵イツシテ」帰ル也。能心得可。」

皆寛永八年菊月吉辰」

前總持當寺十世訣岑存瑣



双林寺切紙0157 生死事大切紙・懷人之作法

(157) 「生死事大切紙・懷人之作法」  
端裏「生死事大切紙・懷人之作法」

懷妊女人死去之大叟

上十五日ニ死スルヲバ、子ヲ男子ニ定メ、下モ十五日ヲバ、  
女子ニ定メテ、名ヲ付デトムラウ也。剃髮<sup>ノ</sup>時ニ、同偈ヲ  
唱ル<sup>レ</sup>。叟三返。偈云、剃除鬚髮、當願衆生、永離<sup>レ</sup>煩惱、究  
竟寂滅。次<sup>ニ</sup>十佛名ヲ唱了テ、一喝<sup>テ</sup>モ躍<sup>リ</sup>倒<sup>リ</sup>テモ、産出  
ノ動キヲナスベシ。人々ノ修行程トスベシ。」此修行無キ故ニ、  
脇ヲサキテ子ヲ得ル也。」  
握<sup>ニ</sup>兼中到<sup>一</sup>、開<sup>ニ</sup>兼中至<sup>一</sup>。上ハ全死、兼中到、下ハ幻化<sup>ノ</sup>泡  
影生<sup>テ</sup>、兼中到也。上圖ヨリ出<sup>テ</sup>、亦黒処<sup>ニ</sup>窮<sup>ス</sup>。無位<sup>ニ</sup>収  
レバ、二ツトモ<sup>ニ</sup>無用処也。」

生死叟大

在判

● 黒処  
● 一  
● 黒処

天童山如浄禪師付与道元和尚

寛永九年西九月吉日

附与

双林寺切紙 0158 拄杖大支

(158) 「拄杖起大支」

端裏「拄杖起大支」  


拄杖大事

拄杖所<sub>レ</sub>起<sub>ル</sub>、釋迦如来ノ時代、鉄虫<sub>ト</sub>謂<sub>ウ</sub>有<sub>レ</sub>リ虫、上有頂天、下金輪水際、「須弥百億袍名虫也。彼ノ鉄虫、衆生食<sub>スル</sub>」恒河沙也。此ノ虫、喝羅々國<sub>ニ</sub>「至<sub>ル</sub>。佛為<sub>ニ</sub>末世ノ衆生<sub>ヲ</sub>引導<sub>シ</sub>、彼ノ虫<sub>ヲ</sub>御弟子<sub>ニ</sub>摩頂<sub>シ</sub>給<sub>ウ</sub>。其ノ名<sub>ヲ</sub>号<sub>ニ</sub>拄<sub>」</sub>杖<sub>ト</sub>、在<sub>ニ</sub>テハ真言一名<sub>ニ</sub>散杖<sub>ト</sub>、在<sub>ニ</sub>テハ武子一名<sub>ニ</sub>弓箭<sub>ト</sub>。彼ノ拄杖日月也。彼ノ袍<sub>ニ</sub>スレバ拄<sub>」</sub>杖<sub>ト</sub>、天下太平、國土安穩也。彼<sub>ノ</sub>以<sub>ニ</sub>拄杖<sub>ヲ</sub>、衆生<sub>ヲ</sub>化度引導<sub>スル</sub>」也。此ノ杖子、日也、鳥也、照<sub>ニ</sub>天地<sub>ヲ</sub>。月也、兔也。依<sub>レ</sub>テ此<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>兔角ノ拄杖<sub>」</sub>也。」

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(一一二)(飯塚)

延文元年八月時正日 永平道元在御判

皆寛永拾季 三月廿二日

師云、拄杖<sub>ヲ</sub>云へ。代、師<sub>ヲ</sub>托開<sub>ク</sub>、吾<sub>モ</sub>放身<sub>ノ</sub>臥<sub>ス</sub>。師云、徹処<sub>ヲ</sub>。代、不<sub>レ</sub>慕<sub>ニ</sub>諸聖<sub>、</sub>不<sub>レ</sub>重<sub>ニ</sub>己靈<sub>ヲ</sub>。師云、畢竟<sub>ヲ</sub>云へ。代、拂袖<sub>ヲ</sub>去<sub>」</sub>。

  
心續(花押)

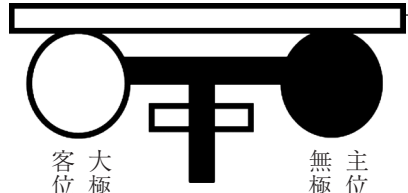
双林寺切紙 0159 宗門二柱切紙

(159) 「宗門二柱切紙」

端裏「宗門二柱切紙」

宗門二柱之切紙

大虹梁也。已下之虹梁者不<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>也。



主位之大虹之柱  
無極

文殊師利  
本師釈迦如来  
普賢薩埵

大極  
客位之大虹之柱

【\*下段】

【\*下段】

本尊於。云、豎、普賢、横、文殊。○師云、豎、横、中間於。  
良久云、即是久遠実城如。来。亦、我今盧舍那佛。  
師云、豎横、何ント。連タゾ。云、豎、法身ト連リ、横ニ  
ハ法性ト連。テ走。師云、此外説破セヨ。云、一機ト連リ、  
連枝ト連リ、同身共名ト連リ、即金烏玉兔兩。光ト連リ、有  
相無性、空相無形、本寂ト連ナツ。夕故ニ、豎ト云ハ恵日大  
聖尊、横ハ滅度多宝佛。豎ハ金剛界夏法身、横ハ胎藏界理  
法身デ走。師云、ドコ迄デ連タゾ。豎ハ、上有頂天、下

阿鼻獄、横ハ只今阿僧祇。外迄テ連テ走。師云、豎与横  
窮リヲ一句云ヘ。云、豎横窮限無イ処ガ、キワマ。リ  
デ走。師云、行李ヲ。弘袖ヲ去ル。師云、趨住シテ速  
道々。抽身ス。

寛永拾年暮春吉日

心嶺堯叟



孝顯現住

双林寺切紙 01091 曹洞之機切紙

(160) 「曹洞之機切紙」

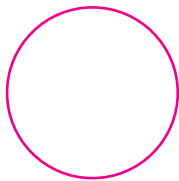
端裏「曹洞之機切紙」

曹洞之機

天曉不露



夜半正明



于時寛永拾年吉日

孝顯閑居心嶺叟

傳附淳鋤長老。」